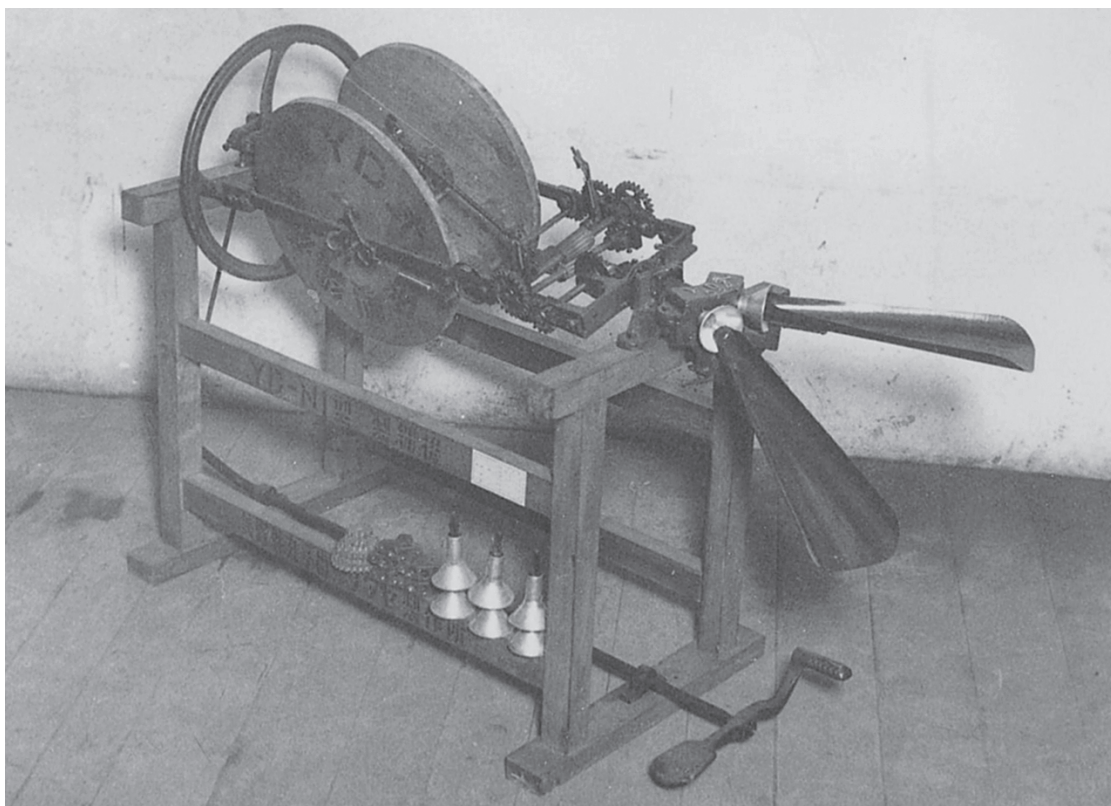


館報

まつやま

第23号

題字 松山篤書
平成26年10月16日発行



Y D式製繩機 (株綿谷製作所所蔵写真
下に並んでいるのは、繩の太さにより交換するための菊口と歯車

1. Y D式製繩機……………表紙
2. 繩ない機……………2～7
3. 報告事項……………8

公益財団法人 **松山記念館**

縄ない機

学芸員 田中 壽子

稲刈りをして脱穀したあと
の藁は、稲作や養蚕の道具ま
た履物など生活の道具に加工
して使われました。藁仕事は
冬から春の田仕事が始まるま
での大事な仕事でした。

縄は物を束ねたり結わえた
り生活する上になくてはなら
ないものでした。昔は藁たた
き石の上に水分を含ませた藁
をのせて木槌でまんべんなく
たたいてやわらかくしたものを、手でより合わせて縄をなっ
ていました。

縄ない機は佐賀県佐賀郡兵
庫村の宮崎林三郎（二八五九〜
一九三二）が明治三八年に考案
し特許を取ったのが最初とい
われています。（公財）松山記
念館は、地元の株式会社綿谷
製作所（以下 綿谷製作所）
が製造販売したYD式製縄機
も収蔵しています。綿谷製作
所は縄ない機全盛の頃、縄な

い機製造の長野県唯一のメー
カーとして都道府県奨励縄な
い機にも指定され全国に拡販
を展開しました。松山製製作
所とともに長野県小県郡で農
機具を製造していた綿谷製作
所のYD式製縄機を糸口に、
縄ない機普及の概要を追って
みました。

【宮崎林三郎による発明】

明治四四年に農商務省農事
試験場に農具係が置かれ改良
農具の奨励はすすみました。
農機具改良普及の手立てとし
て同じ年、帝国農会主催の全
国農具展覧会が開催されたこ
とは大きな契機となりました。
この全国農具展覧会では、農
商務省が購入した外国の農具
を陳列し、また日本の各地方
に使われる優良農具を蒐集し
展示することによって、農具
改良による農業の進歩を図っ

たのです。明治三四年に松山
原造が特許を取得した単鏡
双用犁（そうようり）も出品され高い評価を
得ました。また今回とりあげ
る縄ない機を発明した宮崎林
三郎の出品もありました。

全国農具展覧会で出陳され
た農具のうち主要なものを構
造図とともに解説したのが大
正二年に帝国農会が発行した
『日本農具図説』です。直後
に松山原造は単鏡双用犁も掲
載された、日本の最前線の農
機具を網羅したこの本を入手
し、犁製造販売の拠り所とし
たと考えられます。これは現
在松山記念館に収蔵し、別冊
の『日本農具図説図譜』では
宮崎林三郎がこのとき出品し
た「宮崎式繩撚機械」を「単鏡
双用犁」とともに巻頭の写真
で見ることができます。
宮崎林三郎は三〇歳のころ
眼病の悪化により盲目となっ

た境遇にも挫けず、縄ない機
の発明が農家の福利増進に最
適であると八年の歳月をかけて
試作を重ね「繩撚機械」を
作り出しました。明治三八年
に特許を取得し、明治四四（二
九二）年帝国農会主催全国農
具展覧会には「宮崎式繩撚機
械」と名付けて出品し五等賞
を受賞しています。

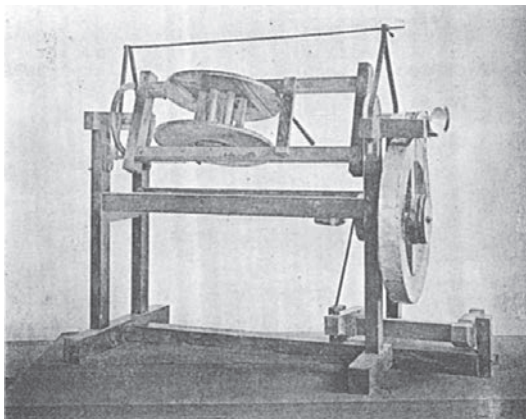
【縄ない機の呼び方】

縄をなう機械を農家は、「な
わなき」とよんで使ってきた
主要農具分類
表」では流通の
最も多かった時
期に、藁草品製
造機の「藁打機・
製縄機・製孤機・
製筵機・藁稗加
工用機・麦稗真
田編機」に分類
され、農機具製
造業者は製品に
製縄機と機種名
称を付け販売し
ました。いつば
う、当時の農家

向けの農業専門雑誌（「新し
い農業」「地上」「農業機械」）
では「なわなき機」として手
引きがさかんに書かれていて、
農家では「なわなき機」が一般
的に使われた名称であったこ
とを知ることが出来ます。近
年の表記では、文章の中で読
みやすくするために「縄ない
機」と縄を漢字で表記した名
称が使われていています。

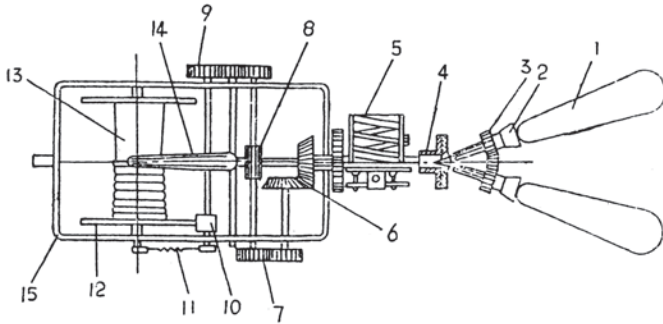
【藁加工機のひとつ】

稲藁を利用した縄・苴（むしろ）・



「宮崎式繩撚機械」『日本農具図説図譜』より

縦巻式繩ない機



- | | | |
|----------|-------------------|---------|
| 1 藁 樋 | 2 撚口喇叭 | 3 下撚齒車 |
| 4 合撚管 | 5 毛羽切器 | 6 傘齒車 |
| 7 掛替齒車 | 8 繩繰出ロール | 9 摩擦ロール |
| 10 摩擦ロール | 11 ロール摩擦圧力調節スプリング | 12 巻取円盤 |
| 13 巻取芯 | 14 配繩機 | 15 回轉金枠 |

繩ない機の構造

雑誌『機械化農業』NO.2425「なわな機調整の要点」より

かす
吠・米俵は、稲作には欠かせない作業道具でした。大正時代になると米の増産に伴って藁の再利用が注目され、また流通経済の発達とともに荷造り用縄やムシロ・カマスなどの需要が高まって稲藁を利用した副業が農家に奨励されるようになりました。そうした背景から繩ない機をはじめとす

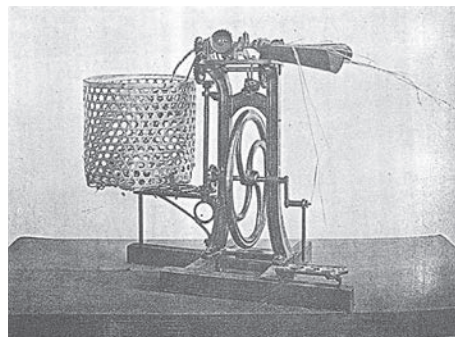
る製藁機、俵編機などの藁加工機の考案製造がさかんに行われました。藁加工機としてもっとも需要があったのが繩ない機でした。繩ない機は次第に小型化し、「人力製繩機」に仕上げ装置をつけた「人力仕上げ付製繩機」も普及するようになり、昭和二〇年代後半には「動力高速度製繩機」が

開発製造されました。

【繩ない機のしくみ】

繩ない機は二つのラッパ状のわら供給口に二〜三本の藁を入れると「下より」がかり、更に二本が組み合い「上より」がかけてられて繩になる仕組みが、ペダルを踏み歯車を伝わった力で装置を動かしてドラムに繩が巻き取られていく過程に組み入れられたものです。広く普及した人力式の繩ない機の構造は、①藁受け装置②下撚り装置③上撚り装置④巻取り装置⑤足踏み装置からなっています。①藁受け装置には、二本の薄い鉄板でできた樋型の供給口をもつものの他に真中を仕切った木板でできたものがありましたが、昭和期になると鉄板製樋型が主流となりました。②下撚り装置はラッパと称する下撚り口とこれを回転させる歯車からなっています。下撚り口には、菊口（千枚羽根とも）と烏口がありましたが、菊口が多く普及しましたが、繩の太さによって菊口を交換し、細繩用は供給口に補充

する藁の本数が少ないので千枚羽根の枚数は少なく、太繩用は枚数の多い菊口を使用しました。③上撚り装置によって、下撚りのかかった二本の藁條が合撚管を通って巻取り装置の回転によって撚り合わされて上撚りがかかって繩になります。④巻取り装置には、初期には巻取り式と籠取り式がありましたが、籠取り式で作られた繩は少し撚りが戻るために軟らかで手触りのよい繩に仕上がりますが長所がありました。次第一に効率よく巻き取って出荷しやすい巻取り式が主流となりました。⑤足踏み装置には、片足踏み式と両足踏み式とがあります。片足踏み式は機構が簡単で、細繩や普通繩の場合には片足だけで楽に踏むことができます。一方、両足踏み式は構造が複雑になるもの踏んだ力が大きく、太繩や毛切装置付きの繩ない機の場合に機能が好まれました。



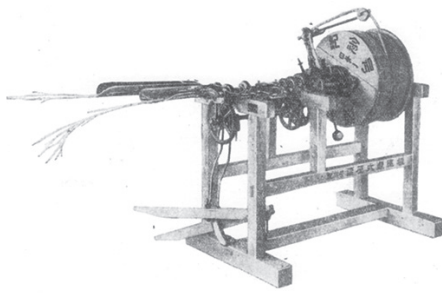
籠取り式の製繩機
「TM式製繩機」『日本農具図説図譜』より

【繩ない機の普及】

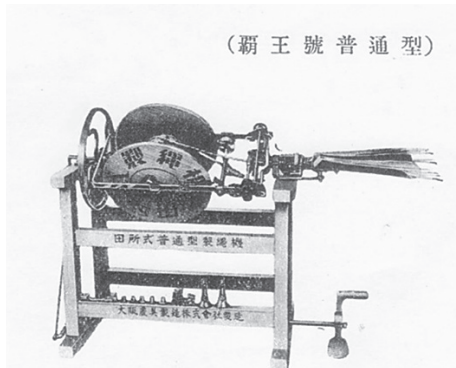
宮崎林三郎によって発明された繩ない機は、日露戦争では繩の需要が高まって機械による繩生産が注目され、また荷造り用繩の生産は流通経済の発展にともしない必要が高まり繩ない機の改良開発が進みました。大正期に普及が進み昭和二〇年代は戦後の農村景気によって需要が増し繩ない機メーカーが性能を競って製造取扱しました。

―大正期―

農林省農務局が大正二四年の調査をまとめた「大正二五年



記念号栗原式製縄機

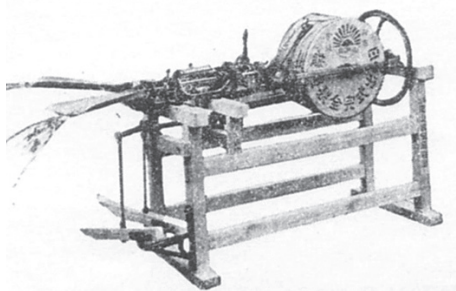


(霸王號普通型)

田所式普通製縄機

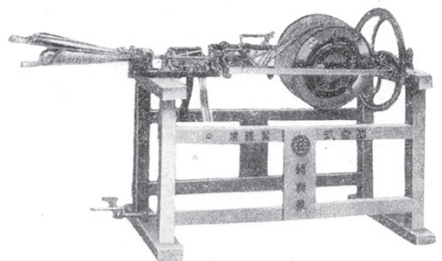
大阪農具製造株式會社製造

田所式製縄機



日の出式製縄機

普通型・新興號・細繩型



新興號(毛切付)

国益式製縄機

「昭和25年全購連選定メーカー 優秀農機具綜合カタログ」(館蔵)より

優良農用器具機械二関スル調査」(館蔵)には過去五年の博覧会や共進会で受賞した優良農機具を用途別に記載し奨励しています。縄ない機では、佐賀市唐人町 宮崎林三郎の「宮崎式繩撚機」、東京市浅草区 本庄商會の「本庄式製縄機」、大阪市北区 荒佐本店の「荒佐式足踏製縄機」、大阪市北区 田所商會本店の「田所式新形製縄機械」、名古屋市 物産共同合資會社の「原式鬚切付製縄機」、名古屋市西区 国益社名古屋支店の「国益式製縄機」が優良農

具として名前が並んでいて、これらの製品が推奨され普及したことが推し量れます。いっぽう長野県での普及統計資料を大正二五年長野県發行の「改良農具二関スル調査(脱穀機・改良犁・製縄機)」(館蔵)にみると、大正二四年末統計の長野県の製縄機普及状況が上位銘柄から普及台数が統計され、郡別に銘柄毎の普及台数も知ることができま

す。その年までに製縄機は六五種二、六二六台普及して大正式(三三三台)、国益式(二八〇台)、シート式(三三三台)のメーカーが上位を占めていま

す。この長野県に普及した銘柄の製造業者を『農機具年鑑』『農業年鑑』等に掲載されたその頃の製縄機広告から拾いだしてみると「大正式製縄機」は東京市本所長崎町の日本發明奨励會、「国益式製縄機」は名古屋市北区志賀町の国益社農機具、「シート式製縄機」は東京市下谷区早坂町の農益社で、大正式とシート式は昭和期になると農機具製造メーカー

「昭和三七年に二万五千台へ漸次

衰微していきました。（『農業機械年鑑昭和三十九年』）

しょう。

【縄ない機の値段】

大正一四年の調査をまとめた農林省農務局「大正二五年優良農用器具機械二関スル調査」には過去五年の博覧会や共進会で受賞した優良農機具を用途別に記載し奨励しています。これによって奨励農機具の製造者とその販売価格も知ることができます。

製縄機では宮崎式繩撚機が四〇円・田所式製縄機械が二三元・国益式製縄機が三三元、犁では高北犁が二二円・深見犁両用号が一五円・磯野犁が一三、五円であることがわかります。松山犁は当時、他社より高額の一八円でした。

これによって普及が始まりました。大正期の縄ない機の値段は犁の二倍以上の価格だったことを知ることができます。冬の藁仕事として縄を手で使っていたのが、一気に高価な機械を使った作業にとって代わったころにも急激な日本の経済成長をみる事ができま

【綿谷製作所の歴史】

YD式縄ない機を製造した綿谷製作所は、大正七年に開業したYD式蚕糸機械の製造を手がけた丸子工業株式会社（以下 丸子工業）を前身とし、昭和二年同社解散後工場長であった綿谷善蔵が譲り受け創業した鉄工機械工業会社で、現在はプラスチック製品を生産する射出成形機の製造を

中心に、松山株式会社等の工作機械の部品製造も手がけている製造開発メーカーです。

製糸業隆盛の時代、丸子工業は依田社生糸試験所の技師佐藤金六が開発した「YD式者繭機」をはじめとする各種YD式蚕糸機械の製造をし他社へも販路をもちました。福井県出身の舞鶴海軍工廠で旋盤技術を習得して優れた鉄工技術をもった綿谷善蔵は大正一三年に丸子工業に工場長として迎えられました。

昭和一一年綿谷製作所に引き継いだ後もYD式蚕糸機械製造や依田社機械の修繕業務

を継続しました。アメリカとの戦争がはじまってから生糸の輸出が停止となり蚕糸業統制の後、製糸工場は閉鎖していき軍需省の要請もあり機械工業会社が製糸工場に疎開しこれらの機械工業会社は航空機の部品や航空用電線を製造するようになりました。綿谷製作所は豊川海軍工廠の傘下となり機関砲弾の信管を製造しました。

【縄ない機メーカーとして】

戦争が終わって松山株式会社の二代目社長であった故松山篤から「永久平和産業は農機具だから、一緒に農機具を作ろう」と声をかけられ、部品作りを依頼されたのが農機具製造の端緒だと綿谷製作所会長の綿谷光男氏は回想して述べられています。昭和三年に独自にYD式製縄機の製造を開始し国営検査にも合格したYD式製縄機は、金沢農業機械博覧会に次いで四日市博覧会で銀牌、北海道博覧会では金牌を授賞し全国に普及していきました。

【国営検査合格機に】

終戦後、農機具は戦時中の不足と戦後の農村景気によって需要が増し、大量な農機具が販売され粗悪品も出回りました。優良品の助長、品質の一層の向上を求め農機具国営検査や都道府県奨励農機具制度が実施されました。

縄ない機の国営検査は昭和二四年・二五年・二六年・二九年に行われ、二九年の実施場

所は不明ですが、昭和二六年までの三年間は新潟県立農業試験場で検査されています。

綿谷製作所のYD式縄ない機は、昭和二四年～二六年に合格機となった五五機のうちの五機種が合格機となり、全国にトップシェアをもった大阪府大阪農具製造の田所式（六機種）や広島県報国農機の栗原式（五機種）と並び多数の合格機を揃えていたことがわかり、縄ない機製造業界では傑出したメーカーとして認識されていたことが伺えます。（『昭和三〇年 農機具年鑑』）

綿谷製作所が国営検査に合

格した製縄機は、人動力兼用仕上機付（中間軸）N四型、同（真結型）N五型、人動力兼用普通機N二型、人力仕上機付N三型、人力普通機N一型の五機。

これらには合格証票が貼付され、国が検査して性能を認めた優良な農機具であるお墨付となり農家に普及していき

ました。国営検査と平行して奨励農機具制度も実施されました。農機具は地方によって立地の相違から適不適があるため、都道府県が審査して性能試験に合格した農機具を奨励農機具として指定しました。製造者の申請があると各県は選定の基準として国営検査の成績、中央地方の試験研究機関の成績、全国博覧会共進会の授賞実績、さらに性能検査の成績を加味して審査し、認定されると県指定の証票の貼付ができました。

縄ない機の昭和二九年八月現在の都道府県奨励農機具（『昭和三〇年版 農機具年鑑』 新農林社）のうち「製



Y D式製繩機展示会出品のようす
 (中央が創業者 綿谷善藏、右が松山篤)
 昭和27年10月 松本にて (株)綿谷製作所所蔵

の作付け面積の多かった新潟県は菓の商品化に力を入れていました。

当時全国一、繩の生産出荷の多かった新潟県で「製繩機」メーカーの筆頭で推奨されたということは、後発の繩ない機製造メーカーでありながら、いかに製品が高い評価を得て普及していったであろうか想像できます。

「Y D式」の名称を追って

Y D式というのは製糸結社「依田社」が開発し特許を取った器具・装置に付けられた商標名です。「依田社」は糸質の向上をめざして生糸検査・繭質試験・繰糸試験を行うための研究機関「依田社生糸試験所」を大正五年に設置しました。試験所では器具、機械の開発もされY D式煮繭機をはじめY D式繰糸釜・Y D式索緒帯・Y D式ケンネル装置などが開発されました。これらY D式製糸機械の発明者は佐藤金六といわれています。Y D式製繩機について当時の関係書類が綿谷製作所に

残っていないため、開発製造の経緯を知ることができませんでした。

佐藤金六が関わっているのか、氏の経歴を追ってみました。「依田社」関係資料を収蔵する上田市丸子郷土博物館にも生糸試験所の資料がなく唯一、佐藤金六の郡是製糸株式会社(現 グンゼ) 移籍騒動に関する内容が書かれた「大正四年九月一日 工藤房次宛 林貞三差出 書簡」が存在することがわかりました。文面から上田蚕糸専門学校の卒業生であることが読み取れ、同窓生名簿を調べました。名簿を追って次のことがわかりました。佐藤金六は上田蚕糸専門学校(現信州大学繊維学部)製糸科の第五回卒業生として大正七年三月に卒業し、依田社に入社しています。昭和五年三月の同名簿の記事からは埼玉県大宮町の片倉製糸の研究所に移籍したことがわかります。その後を追うと昭和二四年に農林省蚕糸試験場技官佐藤金六として第二回製糸夏期大学講師(平成二三年

『製糸夏期大学のあゆみ』農業生物資源研究所より)を務めていることもわかりました。

依田社生糸試験所技師として数々の製糸機械の開発をして特許を取得していた佐藤金六は、高額な年俸を提示する郡是への移籍を上田蚕糸専門学校の先輩であり教員となっていた林貞三の説得により断念し、依田社にとどまり実績を残しました。片倉製糸の研究所への移籍は、昭和四年の糸価大暴落をはじめとする世界恐慌によって依田社の経営が悪化したこともあってなされたことが推し量れます。林貞三の書簡によって鐘紡や大倉組からも懇望された秀逸な技術者であったことを知り、その後を案じましたが農林省の製糸機械技術の専門技官となった事実にとり着き溜飲が下がりました。

前述した移籍の経過から佐藤金六は、昭和二三年に製造が始められたY D式製繩機の開発に関わっていない可能性が高いと考えられます。丸子工業を引き継ぎY D式製糸機械

「繩機」では綿谷製作所のY D式繩ない機は、新潟県で奨励機の筆頭に、福島県では栗原式に次いで二番目に推奨され、また長野県と岩手県でも推奨されて普及したことがわかります。

《繩の生産、日本一は》

繩ない機の国営検査が、なぞ新潟県農業試験場で行われたのかは当時の全国の繩出荷量の統計をみることで理解が

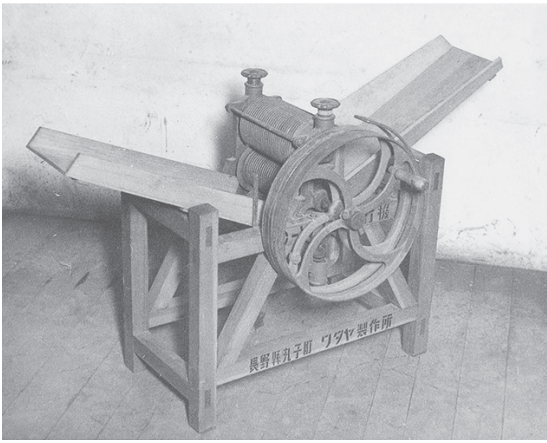
できます。

昭和二四年度分の農政局資料課の統計(昭和三年二月〜昭和四年一〇月)によると新潟(九四三万貫)が全国一位の繩出荷で次いで広島県(三二二万貫)、富山県(三〇二万貫)、埼玉県(二八五万貫)でした。長野県(五〇万貫)は第二四位の出荷量でした。(「昭和二六年農機具年鑑」新農林社)繩生産は農家の冬期の副業として奨励され、とりわけ稲

を製造した綿谷製作所創業者の綿谷善蔵は、後に開発した縄ない機を販売するにあたり全国に名前が通っていた「YD式」の名称を農機具にも継承して使用したものと類推します。

《縄ない機の上手な使い方》

いまだに納屋においてある縄ない機を使って自分で使う分だけ縄をなっている農家はあります。保管している縄ない機を使ってみたい方のため



Y D式藁打機 (株綿谷製作所蔵写真)

う更に軸受けの中心が水平になるようにしっかりと固定します。

- ② 歯車の歯みを取ったごき、油をさして全部の歯車に軽やかに動くように整えましょう。
- ③ 藁を差し込んで逆回転させると菊口は傷みます。逆転は禁物です。菊口の固定突起が取れたりすると撚りがかからなくなります。
- ④ よく使用される縄は三分(二〇ミ)〜二(二ミ)から三分五厘の太さですが、一尺に二七の山数が標準です。撚り数はドラムの回転速度と繰出しロールの速度との関係で決まります。わずかの調節には繰出しロールの圧着程度を加減します。強く締めれば繰出しが速くなって撚り数が減り、緩めれば遅くなるので撚り数が増えます。
- ⑤ 太い藁で作った縄は、丈夫です。しかし、太いのと細いのが混じった縄は特に弱いので、袴をよくとって元を揃えた太い藁を準備することが肝心です。袴をとる藁すぐりには、千歯抜きがあればこれの歯を一枚おきに抜いて利用します。
- ⑥ 作業者の左側に台を置いて準備した藁をのせます。左手に藁を取ったのを右手で二、三本ずつ取り、藁受け台の奥のほうへ交互に入れます。左右の藁の継ぎ目が互いにずれる

ようにし、供給量も同じ位にしないと片より縄になり品質が悪くなります。

【おわりに】

自然素材の稲藁は、再利用が見直され家畜の飼料や有機肥料として再び注目されバイオエタノールへの利用も進みつつあります。

縄をはじめとして藁製品は環境保全型農業に資するエコ素材です。地球環境にやさしい農業をひろめていく上でも稲藁利用は再認識したいものです。

株式会社綿谷製作所の綿谷光男会長には、平素より松山記念館運営にご協力いただいていますことに厚く御礼申し上げますとともに、本稿のために当時のお話と写真資料の提供をいただきましたこと心から感謝を申し上げます。

(文中 敬称略)

【引用参考文献】(文中記載のほか)

昭和五年 雑誌「新しい農業」
「なわな機とむしろ織機の上手な使い方」 洪川利雄著

昭和二年 雑誌「農業朝日」
「ナワナイ機の修理の仕方」 洪川利雄著

昭和二年 雑誌「機械化農業」
「サービス教室 なわな機」 谷喜久治著

昭和二年 雑誌「機械化農業」
「動力なわな機の取扱い」 築山寛著

昭和二年 雑誌「機械化農業」
「なわな機の調整の要点」 田伏三作者

昭和四年 「新農具論」
岸田義邦著

昭和三年 「農機具の手引き」
二瓶貞一著

昭和八年版・一九九九年版・二〇〇二年版
「農機具年鑑」
新農林社刊

昭和三年版 「日本農業年鑑」
農業振興会議刊

昭和三年版 「農業機械年鑑」
新農林社刊

昭和二年 「農機具工業総覧」
近代農業社刊

昭和三年 「長野県産業の振興に尽くした人々」

長野県商工新聞社刊
平成四年 「丸子町誌 歴史編下」
丸子町誌刊行会刊

文化講演会開催

平成二十五年十一月二十二日(金) 松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山(株)三階ホールにて、第二十二回文化講演会を開催しました。

講師に、長野県果樹試験場長の小林文彦氏をお願いし、『果樹農業を巡る現状と地域農業の活性化』をテーマとして講演された。(聴講者三五人)



講演会に先立ち主催者を代表して理事長出張のため清水英一理事が挨拶に立ち、今講演会のご後援

を頂いた上田市、上田市教育委員会を代表してご出席頂いた芹沢寛次(丸)子地域自治センター次長様、ご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた小林文彦様にお礼を述べ、「長野県農業行政の数々を歴任され、その行政に精通されており、果樹王国長野県の現状や多様化している消費動向など農業の抱えている高齢者の後継者不足の対応等についてお話し頂けると幸いです」と開会の挨拶をした。

続いて後援者を代表して芹沢寛次(丸)子地域自治センター次長様から市政運営への理解協力への感謝及び、皆様の益々のご発展とご活躍を祈念しますと挨拶を頂いた後講演に入りました。

(講演要旨)

1. 果樹農業の生産構造の変化
 - (1) 果樹生産の現状
 - 生産力の減少
 - 品種構成
 - 輸入の増大
 - (2) 生産構造の現状
 - 果樹農家の減少と高齢化
 - 規模拡大が難しい
 - (3) 温暖化の影響
 - 園地の流動化が進みづらい
2. 流通の多様化
 - (1) 流通の多様化
 - (2) 加工需要の増加
3. 消費動向と人口の減少
 - (1) くだものの消費の減少
 - ・ 20代、30代の果実の摂取量が少ない
 - ・ 日本の果物消費量はアジア平均も下回り、下位
 - (2) 人口の減少による消費の変化
 - ・ 高齢者の増加
 - ・ 単身世帯の増加
 - ・ 食の外部化
4. 今後の対応方向と地域農業活
 - 性化
 - (1) 生産力の維持・向上
 - ・ 担い手の生産しやすい環境

づくり
労働力確保のための仕組み

- ・ 園地の流動化
- ・ 農地中間管理機について
- ・ 園地継承システムの推進

- (2) 規模拡大と省力化
 - ・ 市場のニーズ
- (3) 品種開発とブランド化
- (4) 新たな需要創造と消費の拡大
 - ・ 果樹試験場の品種開発の方向
 - ・ 販売戦略
 - ・ 少家族化、小食化への対応
 - ・ 新たな需要創出
 - ・ ワインバレー構想

以上の項目に沿い、長野県職員になってから異動する先々で災害に見舞われた経験から、災害がない時は良いが、災害があるとうとう対処するかというものはマニュアル通りにはいかず難しいものだなと思ったことから

長野県の果樹栽培がおかれている現状と生産面での問題、流通消費状況の変化、それに対する取り組みを中心に、併せて農地中間管理機構の話などを交えてご講演いただきました。

理事会開催

★平成二十五年十一月二十九日(金) 協同サービス(株)二階ホールに於いて、第二回理事会が開催され、平成二十六年度事業計画書(案)・同収支予算書(案)・評議員会招集につ

いて審議され、出席者全員の承認を得て終了された。

★平成二十六年二月十七日(月)協同サービス(株)二階ホールに於いて、第三回理事会が開催され、平成二十五年年度事業報告書及び収支計算書並びに財務諸表(貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、財務諸表の注記、計算書類の附属明細書)及び評議員会招集の承認の件について審議され、出席者全員の承認を得て更に議長から評議員会への提案議案(案)として公益財団

松山記念館の運営上の件で提案があり、理事会での議決事項でないため「承認でなく」評議員会への議案提案の了解を得て終了された。

評議員会開催

★平成二十五年十二月十七日(火)協同サービス(株)二階ホールに於いて、第二回評議員会が開催され、平成二十六年度事業計画書(案)・同収支予算書(案)②評議員会招集について審議され、出席者全員の承認を得て終了された。

★平成二十六年二月二十七日(木)協同サービス(株)二階ホールに於いて、第三回評議員会が開催され、平成二十五年年度事業報告書及び収支計算関係書類(案)(貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、財務諸表の注記、計算書類の附属明細書)・記念館への「株式一部寄付の

申入れ」の承認の件について審議され、出席者全員の承認を得て終了された。

その後代表理事からの公益財団法人松山記念館の実情報告を受け全員で意見交換を行った。

松山株新入社員の研修見学



松山株式会社
の平成二十六年
度新入社員は、
四月一日(火)の入
社式終了後、当
館を訪れ、松山
(株)創業以来の犁
及び犁の歴史を
研修した。

平成二十五年年度当館見学者

総数 六三二九名
(内訳)
県外(含外国) 六七、〇%
東信 二一、八%
北信 一三、三%
中信 〇、三%
南信 六、六%

第二十三回文化講演会決定

日時・平成二十六年十月十七日(金)
場所・松山(株)三階ホール
講師・(株)農経新報社
常務取締役 緒方政志氏
演題・「国際家族農業年と
日本農業」